

ラオスの筥に関する物質文化的研究

—日本民俗学との架橋に向けた一試論

辻 貴志¹⁾・広田 勲²⁾

一 はじめに

筆者らは、ラオス南部のサワンナケート県およびアッタプー県で、水田や河川での漁撈に関する研究に従事してきた(辻 二〇一三、辻ほか 二〇一三、二〇一八)。そして、現在、ラオスの漁具に関する物質文化的研究を開始している。とくに、ラオスの漁具のなかでも筥に着目している。ラオスの筥は、タケやラタンといった自然素材を用いて製作され、捕獲対象の生物や筥をしかける生態環境のちがいによって形態が異なる個性を有する。筥はラオス人の生活や生計にとって身近かつ重要な漁具であり代表的な物質文化のひとつを占める。本稿では、ラオスの筥についてとりあげること、民俗文化研究のための資料紹介とする。同時に、日本民俗学における民具研究と架橋するための一試論とする。

筥は、世界的に確認できる漁撈用の物質文化である。試みに、国立民族学博物館(みんぱく)のホームページ上の標本資料目録データベース(<http://htq2.minpaku.ac.jp/info/ib/meta/pub/G0000028mocat>:二〇二二年二月一五日閲覧)を参照すると、四六九件の標本資料の筥が公開されている。地域が不明なものを除き、その分布域と収蔵数を列挙すると、日本(一五七)、タイ(四五)、インド(三四)、ネパール(三四)、中国(三三)、マレーシア(二七)、ラオス(二四)、太平洋諸島(二二)、インドネシア(一八)、パプアニューギニア(一八)、台湾(一七)、フィリピン(一〇)、マダガスカル

(五)、ベネズエラ(五)、オーストラリア(三)、コロンビア(三)、フィリピン(三)、ドイツ(二)、ブラジル(二)、アラブ首長国連邦(二)、カンボジア(二)、ニュージーランド(二)、ボツワナ(二)、メキシコ(一)と世界的に広く利用されていることがわかる。日本の標本資料(三三%)が際立ち、ついでラオスをふくむ東南アジアの資料が全体の二七%を占める。筥の素材となるタケやラタンの資源量の多い東南アジアで、筥漁が盛んであることがうかがえる。このデータを俯瞰することで、物質文化としての筥がいかに人類にとって普遍的であるかがわかるであろう。

本研究は試論であることから、ラオスの筥に関していくつかの先行研究と事例を交えつつ、物質文化としての筥研究の要所をpushさえるにとどめる。なお、筆者らの専門は生態人類学と農学であり、本稿はこれらの分野からの物質文化研究へのアプローチである。物質文化研究は学際性を有するものであり(Hicks and Beaudry 2010)、そのことは日本民俗学における民具研究においても同様である(岩井 二〇一一)。物質文化研究と民具研究のちがいについては、本稿では両者を等質なものにとらえておくが(田辺 二〇一四)、民具研究は日本民俗学の脈絡で使われる印象が強い。

ここで、ラオスをはじめとする筥に関する先行研究について概観すること、筥の特性をふまえておきたい。まず、ゴードン・クラリッジらは、ラオスにおける漁撈具の分布と構造について、地域性と利用法に焦点をあて体系的に

示しており、ラオスの水田および河川における漁撈全般を理解するうえで極めて有益な資料を提供している。本書は、罾についてもその設置の仕方と使用技術を詳細に知ることができる (Claridge et al. 1997)。つぎに、ダムロン・タヤニンとクリステイナ・リンデルは、ラオス北部のカムの人びとが実践する狩猟技術とその物質文化について一貫して深く記載している。本書は、罾と罾に特化した民族誌であり、罾と罾とともに生物を捕える装置としてとらえている。罾と罾は捕獲対象の生物をそのなかに閉じ込め外に出られなくする点で共通点があり、両者の発達史について興味深い示唆を与えることができる (Tayanin and Lindell 1991)。

ラオス以外の罾の研究動向についてもみておこう。安室知は、日本の水田漁撈で使われる罾の総体を非常に大きなものであると評価し、生業研究のうえでもつとも留意されなくてはならない民具としている。そして、日本列島でありふれた罾としてドジョウ罾とウナギ罾に着目し、それらの分布域、漁場、漁の時間、漁の主体者、対象魚、漁獲目的、製作者、罾の形態・構造を分析し、それぞれの生活上および生計上の基盤を考察した (安室 二〇〇五)。西谷大は、中国雲南省金平県における水田漁撈の実態を記録し、とくにドジョウ漁とタウナギ漁に焦点を当て、それらに使われるタケ製罾の形態と水田環境での利用のされ方を詳細に記述した (西谷 二〇一七)。

罾は水田だけでなく、河川や海でも利用される。日本では、サケやマス、さらにはサンショウウオを捕る罾もある (鹿児島県歴史資料センター黎明館・福島県立博物館 二〇〇七)。小林茂は、日本各地の罾を徹底的に調査し、日本における罾使用の民俗・文化・生態をつぶさに示したほか、世界各地の罾についてもふれており、人類史のなかでの民具としての罾の意義を検討した (小林 二〇〇七)。小野重郎は、南九州の河川で使用される罾であるヒビとハジの分

布について考察し、フィリピン、マレーシア、インドネシアを中心に一般的にブブ (Bubu) と呼ばれる罾に形態と呼称が似ることから、それらの南方的要素を推論している (小野 一九八五)。秋道智彌は、世界中で罾に関する研究が体系だっておこなわれていないことを問題提起したうえで、ミクロネシアで用いられる罾の種類、漁法、分布、形態、材質を明らかにし、そこから罾漁の季節性、魚種、漁獲量について比較生態学的研究を展開した (秋道 一九八九)。この研究は、罾漁の基礎的かつ先駆的な生態人類学的研究と評価できる。田村卓也は、アフリカ・ケニア共和国の沿岸部における罾の分布、形態、製作に比べ、罾漁に用いられるエサの採集と漁場利用について分析し、罾漁が確実性にとぼしいゆえに、漁師の工夫がよりよい漁獲に影響することを明らかにした (田村 二〇一九)。筆者は、フィリピンのマクタン島でウツボ罾漁に関する研究をおこない、罾の製作、罾漁の漁場、漁獲、時間利用について、生態人類学的な調査研究に従事してきた (辻 二〇〇七; Tsuji 2013)。近藤日出男は、高知県大月町のウツボ罾漁を調査し、ウツボ罾が旧式のタケ製のものから硬質ビニールパイプに変化した漁撈技術の変遷を書きとめている (近藤 二〇〇三)。インドの北ケーララ州の罾の利用について記した M・レメサンと A・ラマチャンドランが指摘したように、罾には生業利用のほかに娯楽の要素もあることを忘れてはならないだろう (Remesan and Ramachandran 2008)。

以上の罾に関する研究は、基本的に、罾という物質文化を理解するうえで、その形態や生態環境下での利用のされ方に着目しているといっても過言ではなからう。

さて、本稿で、なぜラオスの罾に着目するのかという理由について、ラオスの農民がおこなう漁撈活動が農耕で不足する動物性タンパク源を補ううえで極めて重要であり、罾はそのための主要かつ合理的な物質文化だからである。

また、釜をはじめ漁撈具に関する物質文化研究は、日本民俗学とも大きく接合することから、本試論を日本民俗学と関連づけて展開することは一定の学術的意義が認められるであろう。なお、日本民俗学では、釜研究は伝統的に原始漁法における民具研究と漁業史の観点からおこなわれてきたことを押さえておきたい(岩井 二〇一一・最上 一九六九)。

本稿が試論であるのは、地域、製作者、素材・技術、漁獲対象、設置環境といった釜に関する基本的な情報を理解し、これらの要素から物質文化としての釜についてラオスを手始めに汎文化的に研究していくための素地を築くことを視野に入れていることによる。端的に、物質文化研究の大部は、モノが社会のなかにおいて人類のためになができるかを探求することにある(Hodder 2012)。あるいは、製作物物として本質的であるのは人間的観点、人間による製作と利用の観点とされる(Haudricourt 1987)。しかし、物質文化研究は人間を中心にとらえるのではなく、モノと人間、さらには素材およびモノの使用にかかわる生態環境をふくめた相互作用の系であるという視点から本論を展開する。

二 調査方法

本稿に関する調査は、ラオスと日本でおこなった。

ラオスでの調査は、辻が担当した。本稿に関わる情報収集は、二〇〇八年五月一日～五月一八日、八月一日～八月一七日、二〇〇八年十二月二〇日～二〇〇九年一月一八日にわたって実施した。調査地は、ラオス南部のサワンナケート県L村とアッタブー県S村である。具体的には、水田および河川での漁撈で使われる釜について、形態、用途、設置環境、しかけ方、対象魚種、製作技術に関連する情報を観察と聞きとりにより収集した。

日本での調査は、国立民族学博物館でおこなった。調査方法として、ラオスの釜の収蔵品を熟覧調査した。調査日は、二〇二〇年九月九日～一〇日であった。辻は釜の形態と地域性の分析、広田は釜の素材の分析と撮影をそれぞれ担当した。同館では収蔵品に対する写真撮影と簡単な計測調査は認められたが、詳細な計測調査は資料を傷つける可能性があることからおこなえなかった。本稿に掲載した収蔵品写真の使用にあたり、館側から承諾をえた。

本稿は辻が執筆し、広田が加筆修正した。文責は辻に帰する。

三 調査結果

三―一 ラオス南部における釜利用の一例

ラオスでは、漁撈は人びとにとって経済的かつ栄養的に重要である(Interim Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong Basin 1992)。本稿が対象とするラオス南部の人びとは豊富な淡水の水産資源に強く依存し、それらは食料や収入の大部分を人びとに提供してきた(Baird et al. 1999)。この地域の村落では、家屋の軒下をはじめ頻繁に釜を確認できる(図一・二)。釜は人びとの生活や文化の少なくない部分を構成している。基本的に人びとは農民であるが、メコン河やその支流域の水田を利用して生活し、漁撈にも従事する。このような農民漁撈は、水田稲作で不足する動物性タンパク源を補い、生存するうえで欠かせない生業である(辻 印刷中)。換言すると、メコン河流域では稲作の生産が年間をとおして家族の成員を扶養するには不十分であるがゆえに、農民漁撈が相対的に重要な位置を占める(Santasombat 2011)。あるいは、身近に水域があり、豊富な生物がいることから、人びとは自然と漁撈になじんできたとも考えられる。水域では、釜のほかにも、置針、柴漬笊、魚伏籠、四手網、刺網、投網、ヤスにみられる漁具を

使った多様な漁法が展開されているが、それらのなかでも罎は製作と使用の技術において手の込んだ物質文化と位置づけられる。

罎の材質は、古くはラタンが用いられていたが乱獲により資源量が減少したことから (Mekong River Commission and the World Wide Fund for Nature 2009)、現在はおもにタケが用いられている。くわえて、ポリプロピレン製のバンド (PPバンド) やナイロンひもの切れはしで「カエシ」をはじめ主要な部分を補強する。補強する部分にはかつてはタケのほかにラタンや別の植物素材が使われていた可能性が高い。罎を編むのは、男性の仕事であり (図三)、女性は機織りに専念する性的分業が確認できる。魚類 (タウナギ、ヒレナマズ、そのほかの魚) を捕る罎 (sai pa) のほかにも、カエルを捕る罎 (sai kop) (図四) やエビを捕る罎 (sai kun) もみられ、それぞれ捕獲対象とする生物の習性に合わせ形が異なるともに、必要に応じた罎が選択されている点がユニークである。Sai は地域的に town に置き換えられ、いずれも罎を意味する。そのほか、カニ、ヘビ、貝、昆虫、植物も水田で採集されており、ラオスの水田での生物資源利用は多様である (Pedersen et al. 2014)。タケの利用用途はきわめて広く、罎の素材に利用されるラオスのタケの種類については広田が詳細に記載している (広田 二〇一九)。しかし、近年では、利便性からプラスチック製罎が好まれるようになり、タケ製罎は減少しつつあるとの報告がある (秋道ほか 二〇〇八)。東南アジアの農村社会は、技術的、経済的、政治的なコンテキストから生じている変化によって変容しつつあることから (Santasonbat 2008)、罎の変化をもとに農村社会の生活や環境の変遷も同時にとらえていかなくてはならないだろう。

ラオスの水域環境は変化に富んでおり、水田、河川、池、用水路、雨季に現れる湿地が漁撈に利用される。罎はおもに、水田、河川、用水路にしかけられ

る (図五)。これらの漁場では季節に関係なく漁がおこなわれている (秋道ほか 二〇〇八)。とくに、水田と河川は日々の食料となる生物を採集するうえで重要な空間である。雨季にはこれらの環境を余すところなく利用し多くの生物を採集する光景が広くみられる。水田や池における漁撈は単なる遊びやオカズ捕りとしての側面だけでなく、人びとの社会的つながりを持続するうえで重要な役割を果たしている (秋道・橋村 二〇〇七)。しかし、雨季と乾季の変わり目に、小型の罎を畔にはめこんで魚を捕る形態の水田漁撈 (図六) はすでに減少しつつある (後藤・橋村 二〇〇七)。このこともまた、農村社会の生活の変化が影響していると推察される。

メコン河の魚類は、河川の氾濫によって移動することから (Mekong River Commission 2001)、季節によって罎は使い分けられる (橋村 二〇〇四、二〇〇五)。ラオスの気象は雨季 (六月～一〇月) と乾季 (五月～一月) にわかれ、河川の水位が雨季には大幅に上昇する。そのときに、大型の魚が回遊してくる。人びとはこぞって大きな罎 (top) を河川に設置し (図七)、とくに強い水流の地点にしかける (Burton 2005)。ラオスの魚は河川に棲息し長距離を移動するコイ科やナマズといった「白い魚」、氾濫原や水たまりで棲息するタイワンドジョウ科、ヒレナマズ科、キノボリウオ科といった「黒い魚」、そして雨季に本流を出て氾濫原で産卵し、乾季に河川に戻る「灰色の魚」に区分される (秋道 二〇〇七、Akimichi 2008)。ラオスと文化や生態環境のよく似たタイでは、考古学的研究により、新石器時代の地層から、タイワンドジョウ科、ギギ科、キノボリウオ科、ヒレナマズ科、タウナギ科の魚骨が多く出土しており (Higham 2002)、現在のラオスの水田で漁獲される魚種の構成とほとんど変わらない。タケやラタン製の罎を用いた漁が遠い過去から引き継がれてきた蓋然性は高いが、植物性素材の物質文化は遺物として残りにくい。このよ



図1 軒下につるされた筥（サワンナケート県。2008年5月4日、辻撮影）



図2 タウナギ用筥を背負って水田に向かう男性（サワンナケート県。2009年9月23日、辻撮影）



図5 水田にしかけたタウナギ用筥を回収する男性（サワンナケート県。2009年9月23日、辻撮影）



図3 タウナギ用筥を編む男性（サワンナケート県。2008年8月13日、辻撮影）



図4 製作されたカエル用筥（サワンナケート県。2009年12月30日、辻撮影）

うな魚の種類と習性に合わせて、筥をしかける時期や場所をはじめとする生態的知識を豊かにして人びとが生態環境に適応してきたことは今日の筥利用の実態から明らかである。

ちなみに、ラオス人は筥のミニチュアを車の内部や家屋によく飾る。筥には生物が入り込み縁起がよいとされ、筥はお金や幸福をもたらす縁起物の道具としても好まれている（図八）。

ここまで、簡略ながらラオス南部で普通にみられる筥について、現地でのフィールドワークの結果をもとに概観した。とりわけて、筥は生物を捕るための道具であることから、季節や生物の習性に応じて形態や役割が収斂してきたと考えられる。



図8 蓄財を期して家屋などにつるされる罾のミニチュア（サワンナケート県。2008年5月6日、辻撮影）



図6 水田にしかけられた罾（アッタプー県。2009年10月14日、辻撮影）



図7 大型の罾を河川にしかける男性たち（サワンナケート県。2008年8月6日、辻撮影）

三二 国立民族学博物館でのラオスの罾調査

国立民族学博物館には、ラオスの罾が少なくとも二四点收藏されている。そのうち、ウナギ用罾が三点である。標本名の類推から、これらはタウナギ用罾 (sai tan) であろう。さらに、罾の形状から、カエル用罾 (sai kop) 二点、淡水魚用罾 (sai pa) が二点ふくまれていた。このうち、淡水魚用罾は河川で用いられると推測され、そのほかは水田で利用されると考えられる。

本調査では、同館に收藏されているラオスの罾二四点のうち、重複するものを省き一九点について熟覧調査をおこなった。收藏品に付された情報は、番号、資料名、地域のみであり、収集年や収集者、そしてそのほかの諸情報については現時点で公開されていない。

罾の使用地域は、チャンバサック県 (八)、セコン県 (四)、サワンナケート県 (四)、ルアン普拉バン県 (二)、サラワン県 (一)、不明 (一) であった。ラオス北部のルアン普拉バン県と不明のものをのぞき、いずれもラオス南部で使用されている罾であることが判明した。この地域的偏りは、資料を収集した同館の研究者の研究地域と関連しているであろう。

罾のおもな素材はタケであるが、ラタン、ヤシの殻と皮、木材 (未同定)、煉瓦、化学繊維、漁網も補助的に利用されていることが明らかとなった。

罾は、「カエシ」のある型 (二三)、「図八・九・一〇・一一・一二・一三・一四・一六・一七・一九・二四・二五・二六」、「カエシ」のない型 (五)、「図一八・二〇・二二・二二・二三」、落とし蓋型 (一)、「図一五」に分類できた。「カエシ」のある型は生物を罾から出られなくする捕獲式の罾である。「カエシ」のない型は、水流によって押し流されてきた生物をすくい捕る罾である。落とし蓋型の罾 (jin) は「淡水魚用罾」と標本タグに記載されていた。しかし、これは「罾」に相当する可能性がある。罾と罾のちがいについては議論が



図9 ウナギ用筥（使用地域：ルアンプラバン県。2020年9月10日、広田撮影）



図10 筥（使用地域：チャンパサック県。2020年9月10日、広田撮影）

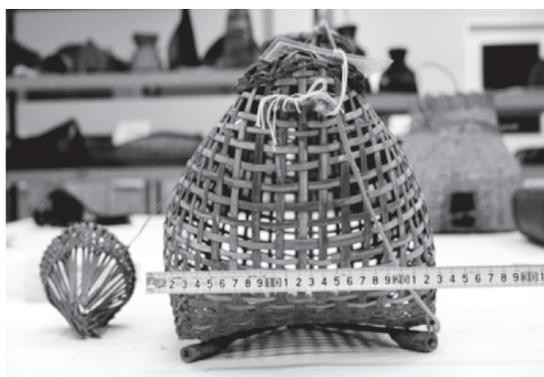


図12 筥（使用地域：チャンパサック県。2020年9月10日、広田撮影）



図14 筥（使用地域：チャンパサック県。2020年9月10日、広田撮影）

必要であるが、ここでは筥は生物の習性を利用して捕獲する道具、畏は生物がその一部にふれることによって作動し生物を閉じ込める作用をとまなう道具と簡単に区別しておく。筥の「カエシ」は通常は一カ所のみもうけられるが、二カ所に付された筥も一点確認できた（図二二八）。筥にはミミズなどの寄せエサを用いるものと用いないものがある。なかにはタケ製の留め具がついたものがあり、これを水底に突き刺して筥を固定する。留め具がないものは石などを用いて固定する場合がある。

筥の形態がさまざまであることは、人びとの生物の習性の熟知、筥の使用環境の特性に応じて形態が適応してきたからであると考えられる。その傾向は、数多くの技術品の発展を通時的にたどっていくと、ますます均衡をもったかたちでだんだん統合されていく過程であり、かたちが機能に適合することを示すものである（Leroi-Courhan 1965）。



図11 筥（使用地域：サワンナケート県。2020年9月10日、広田撮影）



図13 筥（使用地域：チャンパサック県。2020年9月10日、広田撮影）

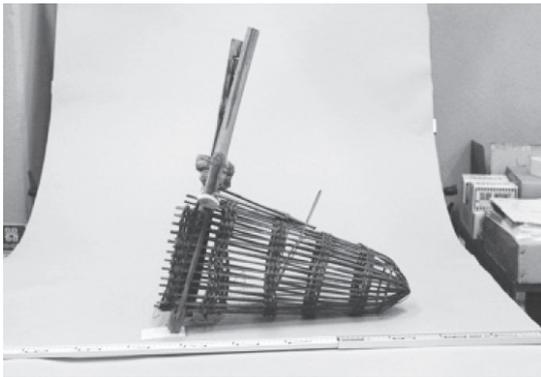


図16 淡水漁撈用釜（使用地域：サワンナケート県。2020年9月10日、広田撮影）

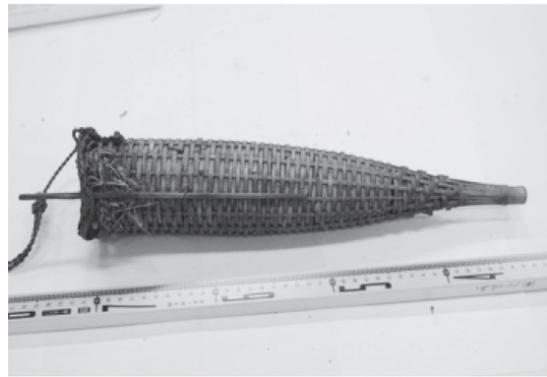


図15 ウナギ用釜（使用地域：ルアンプラバン県。2020年9月10日、広田撮影）

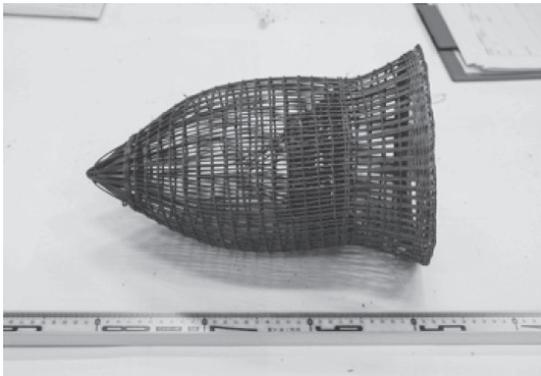


図18 釜（使用地域：不明。2020年9月10日、広田撮影）

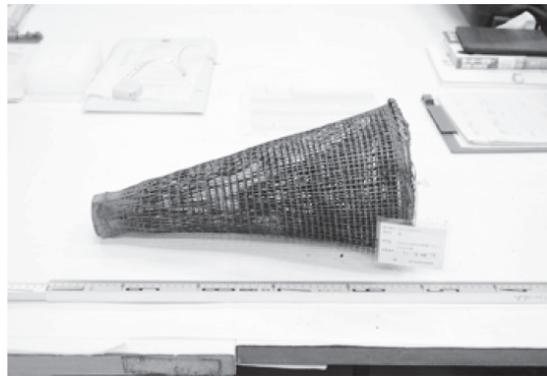


図17 釜（使用地域：サラワン県。2020年9月10日、広田撮影）

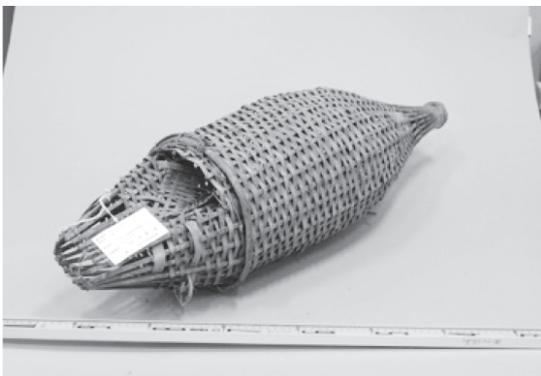


図20 釜（使用地域：チャンパサック県。2020年9月10日、広田撮影）

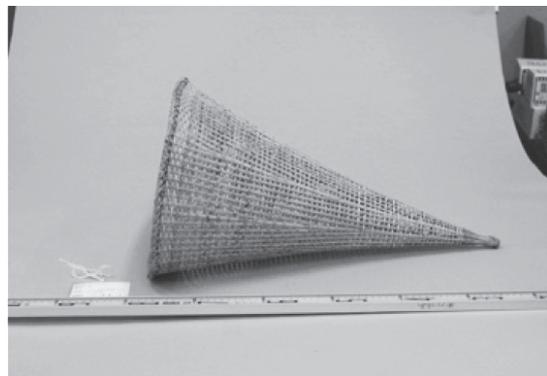


図19 釜（使用地域：チャンパサック県。2020年9月10日、広田撮影）

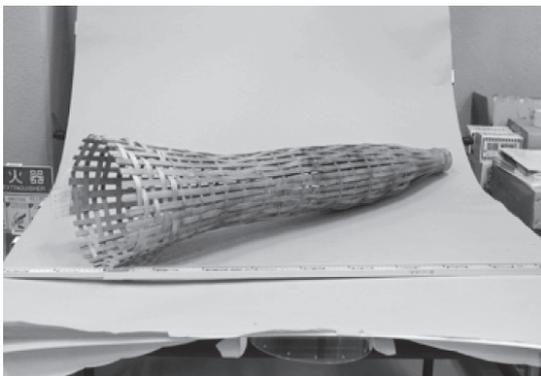


図22 釜（使用地域：チャンパサック県。2020年9月10日、広田撮影）



図21 釜（使用地域：セコン県。2020年9月10日、広田撮影）

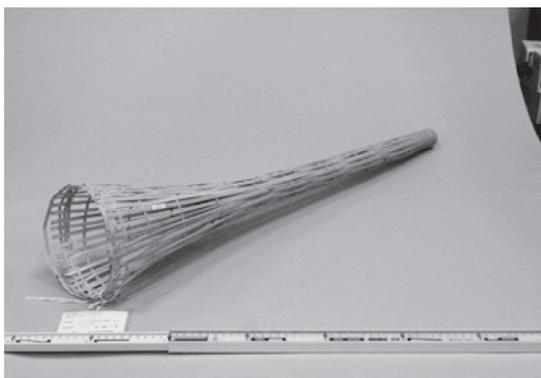


図24 罎（使用地域：セコン県。2020年9月10日、広田撮影）

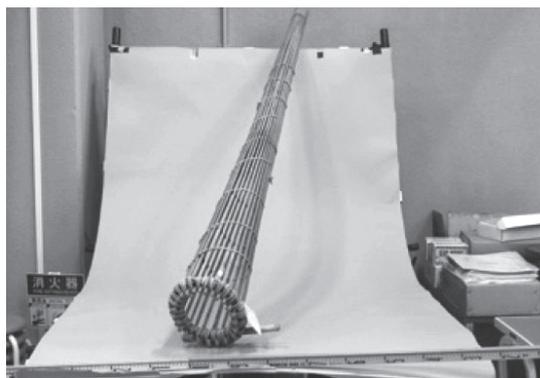


図23 罎（使用地域：セコン県。2020年9月10日、広田撮影）



図26 罎（使用地域：チャンパサック県。2020年9月10日、広田撮影）



図25 罎（使用地域：セコン県。2020年9月10日、広田撮影）

四 おわりに

以上、ラオスの罎について、現地調査と国立民族学博物館の収蔵品の熟覧調査の結果にもとづき報告した。ラオス南部の罎を中心にとりあげる結果となったが、それは現地の水田や河川でそれらがよく使われていることを示す。罎の形状は多様であり、そのことは漁獲対象の生物の習性や水流に関する人びとの生態学的知識を反映していると考えられる。罎は自然の産物であるタケでおもに製作され、それを用いてさまざまな生物を捕るという点で生物多様性の領域を占めるものである (Mekong River Commission 2003)。罎はまた丹念に編まれており、それを作る農民の職人的な技量についても評価すべきである。罎をみることで、ラオスの人びとの物質文化に対する技能的洗練、捕獲対象生物に対する執着、自然との関わり方について考えをめぐらすことができる。いっぽうで、罎の製作にポリプロピレンやナイロンが普及するよ

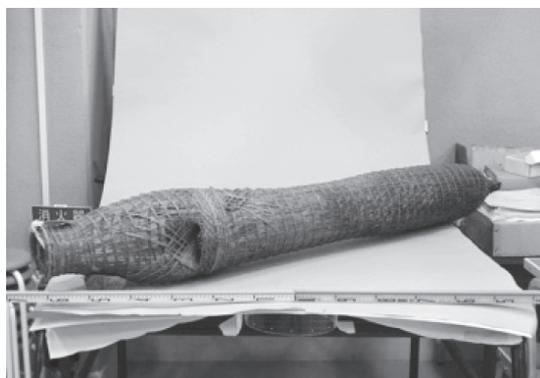


図27 罎（使用地域：サワンナケート県。2020年9月10日、広田撮影）

うになったことで、筥の製作技術や使用により影響が生じているのか検討することも重要な課題のひとつである。少なくともこのような側面からのアプローチが可能であり、さらなる筥研究のためのひとつの視座として肝要であることを指摘しておきたい。より総合的な観点に立てば、たとえば、モノそれ自体や製作技術を超えて、人間の認識体系や社会文化に迫ろうとするシェーン・オペラトワール論(後藤 二〇一三)にもとづく民族考古学的な研究が注目に値する。

筥の調査研究は、民具研究と深く結びつき、日本民俗学においても重要な課題である。宮本常一は民具研究の意義についてつぎのように述べている。

「民具研究の根本問題は民具の形態学的な研究にとどまらず、民具の機能を通じて生産、生活に関する技術、ひいては生態学的研究にまで進むことに意味があると思う。生産、生活の技術、民具の生態学的な研究は、同時に人間の生態学的な研究にふかいつながりを持つものである」(宮本 一九七九)

つまり、民具を理解することは、人間の生態を理解することにつながるという発想が日本民俗学のなかにみてとれる。

筥の研究はまさに、漁撈という生産活動、筥で捕えた生物をタンパク源として利用する生活の技術、筥をいつどこにしかけるのかという生態学的知識に関する領域を占め、自然を利用して生きる人びとの生態学的な技能や知識を理解するうえで有益である。ラオスでは、農民が農業のかたわら不足する動物性タンパク源を補うために筥を使って水域の生物を捕ることのできる生態環境が豊かである。筥を用いて生物を捕獲することはラオスの人びとにとって所与の生

計戦略であり、筥は人びとが生存していくうえで欠かすことのできない物質文化である。

筥を研究することは、ラオスの人びとの民俗を探ることもであり、人びとの生き方を研究するための格好の材料である。筥という古い形式の漁具に依存することは、人びとが家計の状況により、近代的な漁具にアクセスすることが制限されていることの証左でもある(Baird and Shoemaker 2008)。ここに、本研究は、民具研究だけでなく、農民研究を包摂し、日本民俗学における常民研究とも接点があるといえるのではなからうか。田辺悟による民具学に関する理論が本点をいっていることから、ここで引用しておきたい。

「民具学の前提は、一地域の総合研究とその比較にある。(中略)。民具学は『モノ』をとおして人間と自然(風土)とのかわりあいを明らかにし、これまで當まれてきた暮らし(生活)の中に、その所産である歴史と文化をみさだめていくことにある。したがって、大きな地域(単位)でも小さな地域(単位)でも『比較』することにはじまり、『比較』することに終るといってよい」(田辺 二〇一四)

比較の視座は、モノとモノのちがいや関係を明確にすることはもちろん、地域や文化、ひいては人間を理解するうえで欠かせないことは論をまたない。

さらに、筥を研究することは人類史的観点からも重要な視点を提供する。筥は世界中の至る地域の水域で確認でき、効率的に生物を閉じ込め漁獲を可能にする道具であり、設置漁具と併用されることで、よりその効果を発揮してきた(Connaway 2007)。筥はまた受動的な道具であり(Mauss 1967)‘水中で使用される見張りの不要な装置であり、人間の代理として機能するが、正しい場

所に設置されないといけなく (Oswalt 1976)。罎をどこにしかけるのかは、それを使用する人びとの生態的知識によるところが大きく、民族科学的な課題である。日本民俗学の領域で自然知や身体的技能の研究を牽引してきた篠原徹は、身体知や自然知を増大させることによって、比較的道具そのものが素朴なままとどまる方向を指向する文化を認めており (篠原 二〇〇五)、ラオスの罎はこの指摘にあてはまる。道具は、物質文化的観点からだけでなく、自然や技能との関連からも検証されなければならない。もちろんそのかぎりではないが、篠原の指摘は罎研究の裾野を大きく広げるうえで卓見である。

以上、本稿は、ラオスの人と罎との関係が、少なくとも農民漁撈的性格と生態学的知識によって成り立っていることに着目した。そして、ラオスの人びとの農民漁撈が生態学的知識を駆使したものであり、それに比例するかたちでさまざまな罎が利用されていることを示した。罎はまた、人類史的にも検討が必要であることも示唆した。このように、断片的な調査結果にもとづくものの、ラオスの罎は、人と自然との関係を深く編み込んだ物質文化であると結論づけられる。

今後、罎を中心に物質文化としての漁具の比較考察をおこなうために、本研究を日本民俗学における民具研究に近接させ、ラオスの事例から日本の事例をみることで、罎の通文化的研究を目指す。罎をとおしてわかることは数多い。罎はそれぞれ個性を有しており、それを作る人びと、それが使われる生態環境、それで捕獲される生物に関する情報が集まっていることを本論で若干の検討をおこなった。罎を原始漁法や漁業史の観点からとらえてきた日本民俗学の視座は、罎がいかに生態環境の変化や人びとの生活のいとなみとともに持続してきたのかを探るうえでも重要である。以上の課題を学際的に調査研究し、体系化していくことこそ本研究と日本民俗学の架橋にはかならない。本試論は、

ラオスの事例に傾斜したが、日本の罎研究ならびに日本民俗学の民具研究に貢献できることを期してしめくくることとする。不見識な点については批判を仰ぎたい。

謝辞

本研究は、平成三一年度科学研究費基盤研究 (C) 「ラオス南部の水田漁撈民オイの生活と社会環境変化」 (代表者：辻貴志) の成果の一部である。なお、ラオスでの現地調査は、平成二三年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「ラオス村落における慣習的土地所有の実態と変容」 (代表者：藤村美穂)、平成二六年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「ラオス農村における水田漁撈の村落社会学的研究」 (代表者：藤村美穂)、総合地球環境学研究所「熱帯アジアの環境変化と感染症」プロジェクト (代表者：門司和彦) により可能となった。国立民族学博物館の調査では、岐阜大学大学院自然科学技術研究科大学院生の山口晴輝氏に調査補助を担当いただいた。本試論を本誌に掲載するにあたり、近畿大学民俗文化研究所の藤井弘章教授のご配慮に深く敬意を表したい。また、本誌の査読者の方がたには、査読の労をとっていただいた。そして、なによりも、調査の現場でお世話になった方がたに対して厚くお礼申しあげるしだいである。

参考文献

(日本語文献)

- 秋道智彌 一九八九「ミクロネシアの罎漁―漁具・漁法の生態学的研究」『国立民族学博物館研究報告別冊』六二・二六九―二九八。
秋道智彌 二〇〇七「漁撈」秋道智彌編『図録メコンの世界―歴史と生態』東

- 京、弘文堂、三八―三九頁。
- 秋道智彌・橋村修 二〇〇七「水田漁撈」秋道智彌編『図録メコンの世界―歴史と生態』東京、弘文堂、四二―四三頁。
- 秋道智彌・池口明子・後藤明・橋村修 二〇〇八「メコン河集水域の漁撈と季節変動」河野泰之編・秋道智彌監修『論集モンスーンアジアの生態史―地域と地球をつなぐ 第一巻 生業の生態史』東京、弘文堂、一六三―一八一頁。
- 後藤明 二〇二二「技術人類学の画期としての一九九三年―フランス技術人類学のシェーン・オペラトワール論再考」『文化人類学』七七(二)：四一―五九。
- 後藤明・橋村修 二〇〇七「釜」秋道智彌編『図録メコンの世界―歴史と生態』東京、弘文堂、六八―六九頁。
- 橋村修 二〇〇四「ラオス南部のメコン流域における雨季から乾季移行期の漁具と漁撈」『二〇〇四年度生態史プロジェクト報告書』、四二四―四二九頁。
- 橋村修 二〇〇五「ラオス南部の漁具の利用と設置場所をめぐる季節性」『二〇〇五年度生態史プロジェクト報告書』、四二四―四三四頁。
- 広田勲 二〇一九「ラオス北部ルアンパバーン県におけるタケ資源の複合的利用―シェンゲン郡四カ所の事例」『Bamboo Journal』三二：一一―二二。
- 岩井宏實 二〇一一『民具学の基礎』東京、慶友社。
- 小林茂 二〇〇七『内水面漁撈の民具学』東京、言叢社。
- 近藤日出男 二〇〇一「沖磯のウツボ漁―高知西南地域大月町小才角」『土佐地域文化』三：一四五―一五四。
- 宮本常一 一九七九『民具学の提唱』東京、未来社。
- 最上孝敬 一九六九『民俗民芸双書二―原始漁法の研究』東京、岩崎美術社。
- 西谷大 二〇一一『他民族の住む谷間の民族誌―生業と市からみた環境利用と市場メカニズムの生起』東京、角川学芸出版。
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館・福島県立博物館編 二〇〇七『黎明館企画特別展 樹と竹―列島の文化・北から南から』鹿児島、「樹と竹―列島の文化・北から南から」実行委員会。
- 小野重郎 一九八五『民具の伝承―有形文化の系譜(下)』東京、開明堂。
- 篠原徹 二〇〇五『自然を生きる技術―暮らしの民俗自然誌』東京、吉川弘文館。
- 田村卓也 二〇一九「ケニア共和国沿岸部の魚かご漁における漁具と漁法」今井一郎編『アフリカ漁民文化論―水域環境保全の視座』横浜、春風社、五九―七七頁。
- 田辺悟 二〇一四『民具学の歴史と方法』東京、慶友社。
- 辻貴志 二〇〇七「フィリピン・セブ州マクタン島におけるウツボ漁に関する調査ノート」『人間文化』二二：二四―二五一。
- 辻貴志 二〇一三「ユニークな水田漁撈―ラオスのルム・パ」『ビオストーリー』二〇：七六―七八。
- 辻貴志 印刷中「ラオス南部サワンナケート県メコン河支流流域における農民漁撈」『人間文化』五一。
- 辻貴志・Joweria Nanbooze・藤村美穂 二〇一三「ラオス南部の水田漁撈―*loun pa*の構造と機能」『生態人類学会ニュースレター』一八：一七―二〇。
- 辻貴志・Chanthalay Luangphaxay・藤村美穂 二〇一八「変容するラオス南部の水田漁撈―少数民族オイの事例」『日本熱帯生態学会ニューズレター』一一：二二―二六。

安室知 二〇〇五『水田漁撈の研究―稲作と漁撈の複合生業論』東京、慶友社。

(外国語文献)

- Akimichi, T. 2008. Changing Property regimes in the Aquatic Environments of the Lower Mekong Basin in Southern Laos and Northern Thailand. *Tropics* 17 (4): 285-294.
- Baird, I., Inthaphaisy, V., Kisouvannalath, P., Phylavanh, B. and Mounsouphom, B. 1999. *The Fishes of Southern Lao*. Lao PDR: Lao Community Fisheries and Dolphin Protection Project, Ministry of Agriculture and Forestry.
- Baird, I. and Shoemaker, B. 2008. *People, Livelihoods, and Development in the Xekong River Basin, Laos*. Bangkok: White Lotus Press.
- Burton, J. 2005. *Lao Close Encounters*. Bangkok: Orchid Press.
- Claridge, G., Sorangkhoun, T. and Baird, I. 1997. *Community Fisheries in Lao PDR: A Survey of Techniques and Issues*. Bangkok: IUCN-The World Conservation Union.
- Connaway, J. 2007. *Fishweirs: A World Perspective with Emphasis on the Fishweirs of Mississippi*. Mississippi Department of Archives and History.
- Hicks, D. and Beaudry, M. 2010. Introduction: Material Culture Studies: A Reactionary View. Hicks, D. and Beaudry, M. (eds.) *The Oxford Handbook of Material Culture Studies*. Oxford: Oxford University Press, pp. 1-21.
- Haudricourt, A. 1987. *La Technologie Science Humaine: Recherches d'histoire des Techniques*. Paris: Fondation de la Maison des Sciences de l'homme.

Higham, C. 2002. *Early Cultures of Mainland Southeast Asia*. Bangkok: River Books.

Hodder, I. 2012. *Entangled: An Archaeology of the Relationships between Humans and Things*. Oxford: Wiley-Blackwell.

- Interim Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong Basin. 1992. *Fisheries in the Lower Mekong Basin: Review of the Fishery Sector in the Lower Mekong Basin*. Bangkok: Interim Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong Basin.
- Leroi-Gourhan, A. 1965. *La Mémoire et les Rythmes, Tom 2*. Paris: Editions Albin Michel.
- Mauss, M. 1967. *Technologie Manual d'ethnographie*. Paris: Payot.
- Mekong River Commission. 2001. *Local Knowledge in the Study of River Fish Biology: Experiences from the Mekong*. Phnom Penh: Mekong River Commission.
- Mekong River Commission. 2003. *Biodiversity and Fisheries in the Mekong River Basin*. Phnom Penh: Mekong River Commission.
- Mekong River Commission and the Worldwide Fund for Nature. 2009. *The Living Mekong*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Oswalt, W. 1976. *An Anthropological Analysis of Food-Getting Technology*. New Jersey: John Wiley & Sons, Inc.
- Pedersen, O., Chertchai, F., Chanthavang, A., Khanvong, X. and Yoyksaykham, B. 2014. Aquatic Organisms in Rice-Based Ecosystems in Naxaithong, Paen and Pounghanh Villages, Phoukout District, Xieng Khouang Province, Lao PDR.
- Halwart, M. and Bartley, D. (eds.) *Aquatic Biodiversity in Rice-Based*

- Ecosystems*. Rome: Food and Agriculture Organization of the United Nations.
- Remesan, M. and Ramachandran, A. 2008. Fish Traps in Inland Waters of North Kerala. *Fishery Technology* 45 (2): 137-146.
- Santasombat, Y. 2008. *Flexible Peasants: Reconceptualizing the Third World's Rural Types*. Chiang Mai: Chiang Mai University.
- Santasombat, Y. 2011. *The River of Life: Changing Ecosystems of the Mekong Region*. Chiang Mai: Mekong Press.
- Tayanin, D. and Lindell, K. 1991. *Hunting and Fishing in a Kammu Village: Revisiting a Classic Study in Southeast Asian Ethnography*. Copenhagen: NIAS Press.
- Tsujii, T. 2013. The Technique and Ecology Surrounding Moray Fishing: A Case Study of Moray Trap Fishing on Mactan Island, Philippines. Ono, R, Addison, D., and Morrison, A. (eds.). *Prehistoric Marine Resource Use in the Indo-Pacific Region*. Canberra: Australian National University Press, pp. 167-181.